

求むることゝろ

山田 芳太、郎

神を求める心がどれほど深く我々の胸底にひそんでゐるかは言ふ迄もないことだ。我々が無意識に、然し不斷につみ重ねてゐる自己の殿堂の煉瓦工事は、ひとり神の愛によつてのみされうる。我々は生れ落ちると全時にはげしい生の戦を戦はなければならぬ。生は不可能と欲求と、それから生ずる悲痛と惨苦と歡喜と滑稽とに充ち充ちた混沌たる大海である。この波浪の多い、海上にあつて、我々の生命の流ればたへず統一ある力と圓滿な展開とを要求して止まない。この力と展開の努力こそ我々の生を意義あらしめるものである。悲痛や惨苦にさいなまれて生を呪咀したり、無理想な安住主義的妥協に陥ることとは、生を傷ふ分でも決してそれを高めてはくれない。生を高めてくれるものは只神の大きい愛のみだ人はそれによつて運命に對する眼を開かれる。そしてすべてを運命として愛し努力する勇猛心を奮ひ起される。只それだけだ。然しそれが人生のすべてだ。

私は近頃しみじみと以上のことを感じる。どうかして神の愛を信するやうになりたいと言ふ願は一時も私の頭を去らない。その上私は最近數ヶ月の間に於て二つの最も大きい事件に逢遭した。一つは私の尊

敬し信頼してゐる一人の先輩の新らしく這入つた信仰生活である。一つは私の敬愛し涙にまで感謝してゐた父と兄との痛ましき死である。老いて尙強健を誇つてゐた一人の父と、私自身よりも壯健にして快活であつた二人の兄とを、只暫くの間、奪ひ去られたことは私の心にあまりに生々しき傷を負はせた。私は今更ながら生命の果敢さと人間の弱さを痛感した。そしてこの生と死との神秘な、而かも奥深い扉を開くべき鍵をさがし求めた。一時は殆んど病的とまで思はれる烈しいセンチメンタリズムの虜となつた。私は神を呪つた、人を恨んだ、今想ひ起すだけでも堪へられない程強暴な焦慮に悩まされた。この心もとない惱める魂に一道の光明を投げ與へて、私をしてすこしなりとも神の愛を感じるようになりたいとの願望を起さしめたるものは、先輩T氏の極端な狂信的な生活である。

私は今この一先輩をして現在彼が抱有する如き信念に達せしめたる過去の事情と當時の心境とを描きつゝ、私一個としてこの「神」の問題をどんなに考察してゐるかを表はしてみやう。それは私が過去の数年間に達し得た信念と思想との最高點ではあるけれども、尙ゆるめき乍ら一層確固たる信念へと喘ぎつとめる貧しい体験の告白である。私の今とつてゐるこの態度と信念とより一層良いものがあるなら、私は心から教へられんことを希求する。叙述の筆は先づT氏その人と彼をとりまいてゐた過去の事情とから始まる。

抑もT氏は私の母の異母弟である。彼の性格は一口に言へばいちがいな一本調子である。彼はその少年時代から沈毅寡黙の人として、正意正心の人としてその周囲から注目せられてゐたと言ふことである。

然し他の一面に於ては熱烈なる情火に満ち道義的背骨のある鐵腸漢であつたことも言はれてゐる。従つて彼の兄弟姉妹に對する態度の如きは、實に周圍の驚異に値する程のものであつた。彼の過古はその長兄 K 氏に對する絶對奉仕の歴史であつた。後年 K 氏の逆境に沈淪するや、彼はその全身全靈をあげてこれを助け、殆んど無條件的服従を以てその情熱を注いだ。然し彼のこの絶大の努力が何等の效果をもたらずことなく、却つて悲痛なる結末に達した時彼には初めて一つの目が開かれた。

彼は四十才の今日まで臺灣の某製糖會社でかなりの地位を占めてゐた。その地位たるや彼が少壯の時よりその骨を碎き、その汗を絞つてから得たものである。炎帝その威を猛しうし、熱沙人を咬む砂糖畑の勞苦——それだけでも人の心に甚大な影響を與へる。生の意義を痛感せしめる。思ふに彼の心はこれら峻嚴なる自然の空氣の下にあつて、一種特別なる人生觀を形成してゐたとであらう。この人生觀こそ長兄への絶對奉仕として表はされたものである。絶對は頂點である。一步踏み違へれば底知れぬ深淵に這入り込む道である。而も彼はこのクライマックスに立ち、漸次、殆んど不可抗的に、全時に無意識的にこの深淵の岸壁に引きつけられたのである。かくしてこの底知れぬ淵に立ち竦んだ時、彼は彼自身の中に呼吸する「生」を痛感した。彼が過古に於て經來つたあらゆる體驗も、彼が今まで意義づけられて一切の高遠なる概念——換言すれば終局の理想——も今痛感しつゝ、あるこの生に對して何等の權威を持ち得よう？、彼は今までこの生に對して殆んど盲目であつたのだ。従つて彼はこのはげしい壓迫に堪へかねて遁るべき場所を求めた。彼の狂信はこゝにその源を發するのである。成る程彼には一つの目が開けて、自分が深淵に立ち竦んでゐることを認識せしめた。然し一度この深淵を見るや否や、この開かれ

たる目は再びもとの盲目に歸つた。彼には火が必要であつた。一切のものと共に彼自身をも焼きつくすに足るだけの熱が必要であつた。革命の叫びは先づ彼の心から發せられなければならなかつた。

深淵はその深さを感ずるものにとつては無限に深い。彼の心はその深さに一層の眩暈を催して、生本來の姿を悟入せんとする強い意欲を煽り、益々はげしい惑亂の渦中に漂はしめた。この時に於て彼は突然彼自身の如く愛し奉仕してゐた長兄K氏の死に會した。この死こそ彼の心的苦悶に一大轉向を與へた尊き機縁である。今やクライマックスは踏み込され、長兄への絶對奉仕はやがて何物かとならなければならなかつた。さほどにまで思はなかつた人生の果敢なさは豫告もなく冷酷にも彼の心をおびやかした。生と死との奥深い秘密——これこそ彼の解かなければならない重大且緊迫な問題である。彼はそれを考へる時いつもそれらに對して人間の無能無力なることを嘆じなければならなかつた。只一筋の髪の毛でさへ白くし黒くすることの出来ない人間の弱さは、あまりに強く彼の心を壓した。人間は弱い！そして自分自身の生命——自分があれまでに愛撫し是認し尊重し意義づけてゐる自分自身の生命は、どうであらうか？一切のもの——愛や欲や美や歡びや——すべて生の方が自分の中に實現する所のものとは何であるか？それらはこの弱い人間のどうすることも出来ないことではないか。彼はこんなな考へ暮した揚句、遂に一つの結果に到達した。それは一切のものを、自分自身をまでも、人間以上のあるものの働の下に置れたものとして見ることである。この時に於て彼の生命はすでに彼一個のものではない。それは彼心のものではなくして、彼に與へられたものであり、彼に宿つたものである。そこには疑ふべき何物もない、生の事實はあまりに嚴然と見つめてゐるから、この心理的轉向こそ彼の心の中に人格的神を

造り出したものである。

「人間の一すじな心をつきつめて行く、それは必ず宗教的意識に這入り込むものである」とは我等の尊崇する大聖親鸞によつて發せられた不變の眞理である。彼はその性格の示すが如く、この意味に於てすでに生れながらにして宗教的觀念の強烈な人と言ひ得られる。底知れぬ淵に墮んで眩暈を催した彼にとつて、殘された道は只一つであつた。それは信仰に生きること、宗教に救ひを求めることであつた。彼はまた一方に於て彼自身をとりまく妻や子供のことも考へてやらなければならなかつた、自分を父と仰ぎ太陽と戴く哀れな一群を見渡す時、彼の心は更に一層の動搖を起さざるを得ない。自分は父である自分は一家の命綱であると言ふ自覺は彼の心をますます暗くし、これらに對する強い責任觀念はそれをいやが上にも煽り立てる。子供に對する義務責任——これらは今やすべてを放擲して新らしき信仰生活を這入らんとする彼の決心を鈍らし弱める。彼の救ふのは彼自身ばかりではない、むしろ彼よりも弱い一群のために永遠の生と、とこしへの平和とを築き上げることである。彼の悶へは二倍の力を以てはげしく壓し迫つた。悶々數月の後遂に意を決して神に仕へんとするに至つた。絶對他力の信仰こそ彼のとりつく救ひの島である。然し時代と因習とによつて起された在來の宗教に對する不満と、彼の父より受けた傳統的祖國崇拜の念とは、佛教や基督教に向ふべき道を彼の前におほひかくした。彼には不思議な力と、神秘的な重みとを以て、巧みに民衆の胸をつらぬき民衆の心を壓し、加ふるに彼自身の祖國崇拜の念を傷けない新進の宗教が必要であつた。而も丹波綾部に出現し皇道を標榜して立つた大本教なるものは、これら一切の要素を備へたものの如く思はれた。彼は決然丹波綾部に向つて去つた。

一度神に對して開かれた眼は容易に閉ぢられるものではない。殊に我々が肉眼では到底見ることは出來ないと思つてゐる神の姿を、實際眼前寸尺の處に見せつけられるに於ては、この眼は永久に閉ぢられないものである。彼は綾部に於て神の眞姿に接した。こゝに於て彼の信仰は狂熱的となり盲目的となつて行つた。この信仰こそ彼の生の活動を一層潑瀾たらしめ、強烈ならしめその統一的傾向を高めて呉れるものである。

私は大本教の何たるやをこゝに云爲せんとする者ではない。只私の眼に映じた彼の信仰そのものを衷心から羨望する者である。彼の眼にうつる出口某は人間以上の方を所有する貴い聖者である。彼の言を以てすればことだまの主である。彼はこの貴き聖者を通じて神秘的な神を信じ、この神によつては一切は可能であることを信じて疑はない。神は獨り偉大である。他に一物としてこれより大なるはない、神は實在である。人間や万物はすべて神の影像にすぎない。神の人間に與へ給ふものは至善である。その生たると死たるとは問ふところではない。この意味に於ては不可能なることはない。マホメットの所謂山が動くことも、跋者が立つことも、否々！死者が蘇ることも亦可能である。この信仰を得たる彼にはかつて彼の悶への源であつた一家のことも、生死の神秘も、すべては最早や問題ではない。彼のなすべきことは只神への絶對奉仕、神の命するものはその何たるやを問はず最智、最善、最要の務であるを信じてその聖旨に従ふにある。この時に於て彼は全く幸福である。

「たゞ信せよ」これ彼のモットウである。沈魂歸神の靈法によつて靈眼を磨かんとする彼の努力は強烈なる情熱を伴つて來る。彼は奇蹟を信じるようになった。彼自身奇蹟の主体たり客体たるのみならず、

彼以外のあらゆる人々に對して、その最も冷酷なるものに對してさへも彼自身と全様の奇蹟を行ひ得ると信じてゐる。かくして彼は大本の狂信者となつた。彼は一切の雜念を斷つて、生命を賭しても神に仕へんものと覺悟した。衣食住のこと、人との關係、愛と慾と、美と、歡びと、金錢財寶、善惡邪正の觀念——それらを脱却してのみたゞ神への奉仕は完うされ得る。かく信じたる彼は、己れの過去のすべてを以て贖ひ得たる地位を棄て、多年奉職せる會社を辭し、妻子を伴つて綾部に走つたのである。私は彼が今後如何なる道を歩むか知らない。又彼が私に説くように彌勒の世が今二三年の中にやつて來ることも信じない。然し彼の生命に強烈なる力を與へ、彼の心をその散亂から統合せしめたこの信仰——その内容を捨象した信仰そのもの——こそすべてを超絶して貴いものである。「たゞ信せよ。神は信するもの胸に自らを現はすであらう」彼は實に此の言を身を以て現はしてゐるものと言つてもよからう。彼は今、自分自身と全様に他のすべての人々をも神に奉仕せしめようとしてゐる。見知らぬ人にこの信仰を傳へる前に、先づ彼自身と比較的交渉の多い、私に烈しい勢を以て迫る。

彼の信仰は盲目のそれである。然しこの狂信がどれほど深い影響を私の心に與へたかは、私がこゝにたゞたゞしい、ともすれば裏切り易い言葉によつて、書き現はしてみようとするところである。

彼は全力をあげて私に説き迫るけれども、彼の言をその説くがまゝに何等の批判もなさず信することは到底私には出來ない。盲目となるには、私はあまりに理智的である、科學的である。私の受けた教育と私の有する貧しい體驗の結果とは、神よりもむしろ私自身の自我に走らしめんとする。その正なるか邪

なるかは別として、私ぼ、私をしてかくの如き方向に行かしめんとする源流——現代社會關係と教育制度——を呪う氣になることが時折ある。私の心にもやはり神を求め、心が烈しく慄れ悶へてゐるのだ。私も神を知つたと思つたことがある。然しそれは虚偽であつた。中學時代好んで教會に出入したり、佛門の巨刹に參禪趺坐したりした頃は少しは神を見る眼が開かれたやうに思つたことがある。然し私の心の一方に巢くつてゐる反逆者の心は、宗教に近づくことは許すけれども、それに絶大の權威を感ずるまでの境地に這入ることを阻み止めた。或る時は聖壇の下にひざまづいて、他の人から見れば敬虔とまで思へるほどの懺悔を試みた。然しそれは眞に罪を悔い改める正しい心からの叫びであつたらうか。私は他の人から眞實の私以上に評價して貰ひたいと言ふ一種のさもしい虚榮心からそんなに振舞つたのであるまいか。若くは懺悔することそのものに特殊の快感を覺けたのであるまいか。かう自らに問うてみる時、私はあまりにそれらの多くを行つてゐたことを耻かしく思ふ。然し必ずしも悔いはしない。上つ調子な浮いた淺はかな考へではあつたけれども、少くとも當時の私にとつては最も必然らしく且最も私らしい生活過程であつたやうに思ふ。その上この貧しい體驗こそ今日の私を導いてくれたものであつたから。

私はかう云ふ態度をいつまでも持續するには到底堪へられない。「お前はそれでも眞劍なのか」と日に幾度も幾度も自らを責めさいなんだ。従つて人知れぬ煩悶の時が暫らくつゞいた。嶮はしい山路をたどる貧しい人のやうにあてもなく迷ひ歩いた。人並に不眠症に悩まされたこともあれば、ある時は一心不乱に馬太傳の福音をむさばり讀んだこともある。神を見出し得んためにはあらゆる俗界のものを棄て去

らう、權勢も富貴も美も智も、否々私自身の肉体をも投げ出さうと意を決したこともある。その結果はどうであらう。私が惱めば惱む程、あせればあせる程私はほんとうの道を見失つてしまつた。將に溺れんとするものは只一本の藁をもつかむ。私は一層繁く教會に入入するやうになつた。然し私の見出したものは神ではなくして、虚偽であつた、偽善であつた、因習であつた、形式であつた。そこには祭壇こそなければ、眼に見へぬ偶像があつた。私は抑へ難い不満と、言ひ知れぬ寂しさを以て教會を棄てた。私は再び暗黒の道を行き、つまづきながらたはれながら深淵の底に下り初めた。

この惱みの時にあたつて、私の心を異様な光を以て照らし、温かい愛を以て抱いてくれたものは大聖親鸞であつた。絶對他力の信仰——それを求めることが私の初めからの本願である。然し神を求めることそれ自身もはや他力の範圍を超へて自力に入つるものではあるまいか。私は他力を本願として知らず知らず自力に陥つてゐたのだ。私は先づこの自力の心を棄てなければならぬ。こんなに考へて私は親鸞の教義に赴いた。眼に涙を浮べる程感激してその書をひもどいたけれどどうしても信じられない。私の心がすなほでないからか、それともあまりに虚偽を見せつけられたからか。「念佛だけが正定の業である」と親鸞は説く。この聖語の意を充分にくみ得ないのは私の弱さである。遂に再び逆者はさ、やく「あまりに都合のよすぎる救ひではないか」と。私は亦親鸞を去らなければならなかつた。呪はれたる心よ、お前はどの先どの道を進まうとするのか？

或る宗教家は言ふ、「神は求めるべきものではない。只信じなければならぬ。神の存在はユークリッドの幾何公理と全様一點の疑を許さぬ自明の事實である」と。これらの言葉は既に耳にた、この出来る程聞か

されたことである。然し私の心はそれをそのまま、おいそれと信じ得る程すなほに出来てゐない。それにも拘らずやはり信ずるものがないのは堪へ難いことである。自分には神は見出し得られないのか？と思ひつめると、立つても坐つてもゐられないほどいら立つてくる。私はよく大熊星座に輝く星を眺めながら、乳を求めて泣く子等のやうに夜を悶へ明したものである。

かゝる焦慮と感乱の時が暫時繼續した後、私の中の反逆者の心は三度さゝやいた、お前はお前の意のままにならぬ一切のものをすべて神に委ねて自らは安價な妥協に生きんとするのではないか、お前は人生をまともに見つめ得ないで卑怯にも奴隸的屈從心の對象を神に得んとするのではないか、若しくは、自己の周圍に絶大の高壁を設けて自己苛責の快樂を貪らんとするのではないか、それとも、神を自己の中に把握し盡さんとする欲求も努力もしないで、只自己以外の高處に文字通りに空想し推測するものではないか、と。このさゝやきは私の心に一つの轉向を興へた。私の求めてゐたものは内面的に把握せらるべき神ではなくして、外面的に空想せらるべき神であつた。私自身の神ではなくして教義上の神であつた。私は自己殿堂の煉瓦を一つでも多く自分自身の手で積み上げようとししないで、それを神の力でしようとしてゐるのだ。自己をごこまでも深く掘りきわめないで彌縫し姑塗しようとしてゐたのだ。私はまつ神よりさきに自己をきわめなければならぬ。自分自身をも把握し得ないでどうして他に信仰を得ることが出来よう。たとへ得たとしても自分自身を信せずして得たそれは恐らく根底のない空虚なものであらう。然らばそれは如何なる方法によつてなさるべきか。私は歴史をひもどく毎に、赫灼たる光を放つ偉大なる人格者の群を驚異を以て眺める。そして天才の天才たる所以は只その悲痛なる運命の愛こそ

の最も力強く神の力を示現した點にのみあることを知る。彼等は運命を愛することによつてたへず自己を深め、最もよくすべてを生かしてゐる。彼等の通つた峻しい道は、ともすれば人生を回避し呪咀せんとする私の心に絶好の刺戟劑となり防腐劑となる。彼等が人生の最後の一滴まで嘗めつくしてツアラツストラの所謂「かくの如きが人生なりしか。いざ今一度！」と叫ぶ態度は人生を乗り超へて行かうとする勇氣を煽る絶妙な讚歌である。彼等の傳記は苦痛の多い、この人生を當然の運命として愛することを教へるが故に無限に尊貴である。私は彼等の生涯のあらゆる點から、私自身を高める機縁を出來得るだけ多く見出すことを學ばなければならない。そして神の愛と力を最もよく生かし、最も深く人性に交渉させたのは、教義や牧師の言葉ではなくして、彼等天才的藝術家の作品であることを知らなければならぬ。こんなに考へた私は所謂宗教としての宗教を去つて、宗教的色彩の濃厚な偉大なる藝術的作品と、その藝術家の傳記とに赴き走つた。

若くして肉慾の谷に轉び耽つた聖アウガスチン、饗宴夜を日をついで歡樂の甘酒に酔つた聖フランチェスコ、靈に對して肉の過重であつたレオ、トルストイ、唯物的無神論を抱いて年老いるまで神を知らなかつたストリンドベルヒ、現代青年の聖書とも言ふべき「カラマゾフの兄弟」を描いたフョードル、ドストイエフスキー——これらの人々は基督や親鸞と全じやうに、その外的經驗と内的争闘とに於て自己の生活を深く深く掘り下げることが教へて呉れた。

何物にも信じ頼ることが出來ず、而かも何物かに信じ頼らなければ生きて行くことが出來ないのが弱い人である。かゝる人にとつて進むべき道は只一つしか殘されてゐない。それはまづ自己を深くきわめ、

自己の個性に於てすべてが可能であることを信ずることである。少くとも信せんとする努力をなし、それによつて可能であるやう自己を仕向けて行くことである。個性に立ちかへること——それは神を失はしめるかも知れないが、一方に於て、自己の進むべき道と自己の依頼すべき新らしき信念とを與へてくれる。私は何よりもさきに私自身に立ちかへらなければならぬ。

今までの私は私自身をのけものにして、只顔前に神の假面をかけやうとしてゐたのだ。神を信じようとしてゐたのではなくして神を造り出さうとしてゐたのだ。私一個の小さい鈍麻な頭腦と、狭い偏端な世界觀とで神を推測し想像し、それを人間的な尺度にあてはめて、一つの新しい目に見えぬ偶像を造り上げようとしてゐたのだ。私は決して超思料の世界の産でもなければ、又没理性の世界の出でもない。然るに神を求めて超思料な没理性な境に惱みさまようことは、實に馬鹿氣切つたことだ。そんなことでもして力強い一步を人生に踏み入れることが出来よう？先づ個性に立ちかへつて自己を築き直せ！こんなに私の中で神を求める心を笑ひ裏切らうとするあるものが叫ぶ。

私が偉大なる人格者の作品と傳記とをひもとく中に、漸く私の心の中に擡頭し初めたのは自己に對する目覚めである。個性への歸着である。就中壯年時代のドストイエフスキーの内的生活に表はれたイバンである偉大なる神の否定である。全時に「もし神にしてあらばわれ如何でか自らの神たらざるに堪ふることを得ん。この故に神はなきなり」とツアラトストラをして絶叫せしめたる神をなみするものニイチエの電光は、私の心に無限の共鳴を與へて神の死を喝采せしめる。そして私にとつては私の個性以上にあるものはなきが故に、神を去りて個性を信ずるやうにならしめんとする。かくして私の個性は今までと

つてゐた道の矛盾してゐることを指示して神を去らしめんと努める。私が超思料の産でない限り、所謂神は私にとつて無意義である。私は神を意義あらしめんとすれば、それを私の個性、換言すれば私自身の内面に把握しなければならぬ。しかしその時は神は人間以上のものたることは出来ない。この故に所謂神は私自ら神となるのでなければその存在を許すことは出来ない。もし私が神の名を棄て得ないで尙それに執着するなら、私はその名を私の生命——生命の影たる個性に與ふべきである。然しごんに私が努力しても、私は私の個性を絶對的に偉大なものであるとは信ずることが出来ない。又一方に於てやはり神を去り得ないで、尙それを求めそれに心を引かれる心が比較的強く根を占めてゐる。自らのみじめさを哀れみ笑ひつゝも、この兩者の間を遲疑し惑亂されつゝさまよう私は、果して何處までこの道をたざらなければならぬのか？私の新しい悩みはこれだ。私は私自身の内に真如の本性を攫み得ない。しかし何時までもこの煩はしい時をつゞけることは弱い私には甚だしい苦痛である。私はこの際ごちらか一方に決然走るべきである。神か自我か？斷然態度を明らかにするのでなければ残るは只狂あるのみである。

「自我へ！自我へ！！」私の心の中の神を無みするものは烈しく叫びせまる。「お前は今まで神を求めて迷つた。そして拾ひ得たものは只強暴な惑亂と焦慮とのみだ。

しかし、いくら神に信を得ないお前でも自身には絶對奉仕出来るだらう。お前にはお前自身より外に頼るべきものも、より以上のものもないのだから」と然うだ。私のとるべき道はやはり自我への歸着である。それが私——少くとも現在の私にとつて最も良い且つ最も自然な道であるらしい。私は斷然神を棄て

よう。そして自己の中に生の本質を認めようた。とへそれが誤りの道であるにせよ、今まで經て來た私の貧しい體驗と、乏しい心の糧とはこれ以上の態度をとることを許さない。もし誤つてゐるなら、それは時とともに、私の體驗が豊富になるとともに、漸時に正路に引き戻されるだらう。その時こそ私は、はつきり私の行くべき道を見詰めて私の中に神を喚起することが出来るだらう。ある人々は私のこの態度を、私の最も憎む妥協であると言ふかも知れない。又卑屈な遁竄であると難するかも知れない。然し私はあまり辨解がましいことを言ひたくない。それは私が必然とらなければならぬ道であるから。

自己の生の中に生の本質を認める——そしてそれに於てすべてが可能であることを信する——これこそ私の欲する態度である。信念である。この信念に於て、私は古の聖賢が神に於てなしたと全様、運命を愛することを學ばう。悲みを透してのみ輝く歡喜を得た偉大なるペートホーフエンの態度は、この信念に生きんとする私にとつて大なる慰藉であり、全時に鞭である。

運命を愛することはやがて大いなる愛を得る所以である。大いなる愛、宗教的愛——只そのみが人生を高める。開展の努力と、それに對する獅子の如き勇猛心を煽り立てて、たぢろかずに人生の諸相に向はしめる。

私は神を棄てた。神を求むることはげしきが故に神を失つた。神を私自身の中に把握し盡さなければ堪へられないが故に天上の襲撃を企てた。そして私自身に立ち戻つた。然し自己に於ける信仰を最上のもと思つてゐるものではない。只自己に於てすべてが可能であるやう努力することは、その努力だけでも何物かであるだらうと信じて疑はないだけだ。

T氏の信仰生活は私をして驚異せしめた。そして私が今はつきりした態度を示すやうになつた大きい機縁である。私は彼に心から感謝する。